

第十七編 世界を揺るがした出来事

(ヴァスコ＝ダ＝ガマと「インド航路発見」そのIV)

ガマ船隊、祖国ポルトガルに帰還：

ヴァスコ＝ダ＝ガマの船隊は1498年8月29日にカリカットを出航し帰路についた。ポルトガルへの航海は数え切れない事件で中断された。東アフリカの海岸に至り、マリンデイでの歓迎を受けて停泊したあと、船隊は1隻の船を放棄せざるを得なくなった。サンラファエロ号である。時に1499年1月13日の事だった。ガマは、それを操作する十分な水夫が最早いないことから焼却を命ぜざるを得なくなったのだ。3月20日に、一行は喜望峰を回り、インド洋に別れを告げた。大西洋が再びうねりを上げていた。

ベルデ岬 (Cape Verde) に近い数ポイントで、残っている2隻が分かれた。サン ガブリエル号は、今やヴァスコ＝ダ＝ガマ自身が船長になっていたが、彼の弟のパウロの病気の為、サンチアゴ島で停泊した。ベリオ号は、尚、ニコラス クエリョが指揮を執っていたが、恐らく、キャプテンのガマよりも先にリスボンに着きたいという抑えがたい願いのために、そして多分、他の停泊ポイントでガマを待つという約束に反しての事だと思うが、そのまま、ポルトガルへ向かった。クエリョは、テグス川の河口に1499年7月10日に入港した。一方、サン ガブリエル号のヴァスコ＝ダ＝ガマは、弟を休息させる為に島々の浜辺に何度も停泊を繰り返しながら、7月28日または29日だと信じられているが、リスボンにやっと繫留したとされている。

アフリカ周航の航海とインド航路発見はポルトガル人にとってあらゆる意味で「大成功」であった。D. マヌエル王は、喜び、主だったものたちに惜しげもなく金品を下賜し、報酬を与えた。ヴァスコ＝ダ＝ガマを貴族に取り立て、彼と彼の子孫にたいしてヴィデイグエイラ伯爵の称号を許した。彼はまたガマをインド提督に任命し、彼に多くの褒美を贈った。

D.マヌエル王の名の下に次のような布告が出された；

“この書状を読む者に告げる。我が王は、我が王室の側近・ヴァスコ＝ダ＝ガマが見事にその任務を全うし、彼の部下や彼自身の生命を危険に晒しながら、君命を成就した事を、彼は、我が船隊のキャプテンとして、その弟パウロ＝ダ＝ガマと王室の側近・ニコラス クエリョと共にインドへの航路を探索した事を、ここに広く知らしめるものである。よって、我が王は、ここに、彼をあらゆる名誉と栄光の証として、インド提督の位となし、提督の資格をもって、全ての自由、権力、司法、地代、特権、権利を差配することを許すものである。

尚、この成功による喜びを分かち合うために、D. マヌエル王は等しく御自身やポルト

ガル王室にも寛容とられた。そして、王は、王御自身を「国内にあつてはポルトガルとアルガルヴェの王にして、アフリカの地にあつては、ギニアの君主にして征服王、エチオピア、アラビア、ペルシャ、そして、インドとの航海と貿易の君主」(King of Portugal and of the Algarves, at home and overseas in Arica, Lord of Guinea and of the conquest, navigation and trade with Ethiopia, Arabia, Persia and India) と呼ぶようお命じにられた。“

「インド航路発見」のニュースは国境を越えて：

その年以降に、D.マヌエル王はイタリアで小冊子の印刷を命じ、ポルトガルによる「東方への航路発見」を宣言した。この小冊子は欧州の文化的サークルに出回り、何ヶ国語かに翻訳され、ある場合には、その時代のベストセラーにまでなった。全ての小冊子は、D.マヌエル王の明確な意図を声明の形で伝えていた。つまり、ポルトガルによってキリスト教世界に齎されたその偉大なる貢献を強調し、かつ、スパイスの独占とその結果齎される利益を「東洋の変革」と「イスラムに対する聖なる戦い」の財政的裏付けとすると正当化していた。16世紀の夜明けに、ポルトガルとその王は、欧州の君主達の中にあつて、比較的地味な位置を占めていたに過ぎなかった。D.マヌエル王の野望とは、彼とポルトガルを欧州政治世界の中核の位置に押し上げることであった。

D.マヌエル王は、ポルトガル国中のすべての都市と目ぼしい町々で、国を挙げてのお祭りを開催するよう命じ、かつ、特に新しく鑄造された金貨に、彼の新しいタイトルを彫り込ませた。その金貨は、特別に「ポルトガル金貨 (Portuguese)」と呼ばれた。更に重要なことは、ヴァスコ＝ダ＝ガマの航海の物語を流布させた事であった。全欧州と東洋の一部を駆け巡ったその冒険の物語は、ポルトガルとその王に名声を齎した。

D.マヌエル王は、宣伝キャンペーンをあらゆる局面で開始し、ヴァスコ＝ダ＝ガマの成功を公にした。直ちにカソリックの君主たちに、教皇庁のポルトガル派の枢機卿に、そして、ローマ法王に対して、親書を認め、ポルトガルの快挙を知らせた。

ここに D.マヌエル王の法王宛て親書の一部を紹介したい：

“我、D.マヌエル、神の御慈悲によって、「国内にあつてはポルトガルとアルガルヴェの王にして、アフリカの地にあつては、ギニアの君主にして征服王、エチオピア、アラビア、ペルシャ、そして、インドとの航海と貿易の君主」は、最も敬愛する父君に、他でもない、かくも深き喜びに満ちたお知らせを献じ奉る。

朕は、エチオピアとインドの探検においてその当初の目的を達成したことを、深甚なる感謝と共にお伝えしたい。数ある聖人の中にあつて、先ず第一番目に、法王様にお伝えしたいと思い、最も敬愛する父である法王様に、インドにおいて数ある港の中で、インドの

商品の主要な中心的取引所、カリカットなる都市、ここでは、シナモン、クローヴ（ちょうじ＝丁子）、胡椒、生姜、ナツメグ、ベンゾイン（安息香）、琥珀、ムスク（麝香）、真珠、ルビー、そしてあらゆる種類の貴重な石と商品（香辛料）を齎してくれた、その発見と探検から戻って参りました者たちの事をお知らせしておくべきかと思えます。しかも、この都市の王は、その市民の大多数がそうであるように、キリスト教徒であると信じます“

地中海商業都市の没落と台頭：

リスボンから届いた「インド航路発見」の最初の報告を受けた時のヴェニスへの反応は、対照的に、一種の狼狽に近いものであった。このニュースは、ヴェニスにとって、彼等の大きな利権を左右するものだった。全ヴェニス市民が、新しい航路の発見を、彼等の先祖伝来の栄華を築いてきた時代の終焉を告げるものとして、恐れをもって深く感じとっていた。このニュースは、ヴェニスがかつて受け取ったどのニュースよりも最悪のものであった。そして、現在と未来に遭遇するであろう全ての戦争や災厄などは、このニュースに比べれば取るに足りないものであった。

ポルトガル人のインドへの航海の最初のニュースによって引き起こされた動揺が一旦収まると、ヴェニスの死命を制するこの脅威に終止符を打つと称して、極端に楽天的な議論をする者たちが現れた。ヴェニスの市民たちの、一種の諦めに近い雰囲気代表する議論であった。

“ポルトガル国王の死がインドへの航海を妨げるのに重要な効果があるかもしれない。D. マヌエル王が死ねば、この王の如く、商品に喜びを覚え、かつ、他のものに、さほど興味を覚えないような「代わりの王」を見つけることは容易ではない。そして、もし、このような条件をみだす「代わりの王」が見つからないのであれば、インドへの航海は、宮廷の支持を受けられないだろう。そして、その「代わりの王」が命じないならば、一人一人の商人たちが、船を出すことなどできようはずがない。ムーア人の艦隊が既にキリスト教徒の商船の拿捕に狂っている時に、2－3船の船団を出すことは安全ではないし、無謀な自殺行為だからだ”

トスカナ地方の商業都市は、ポルトガル船隊の東洋への航路発見、貿易、航海の成就のニュースに異なる反応をした。特に、ポルトガルの拡大主義者のプロジェクトに関心を持ち、財政的にも技術的にも援助してきたジェノヴァやフローレンスの商人たちは、ヴァスコ＝ダ＝ガマの快挙を喜んだ。そしてポルトガル人たちの探検と貿易から出てくる利益と恩恵を分けてもらおうと期待した。フローレンスを中心とする都市群は、アジアの商品を欧州に入れる通路の関門を押さえているヴェニスのポジションを破壊したいと強く望んでいた。それが、今や、「大西洋ルートの新発見の衝撃」によって、「インド洋への唯一の

道」を押さえていた地中海商業都市群に「没落」を味あわせる可能性がでてきたのだ。

ムスリム世界から見たポルトガルの進出：

ヴァスコ＝ダ＝ガマのインド航路発見は、インド洋でのポルトガル人の最初の出現であった。インド洋に於けるポルトガル人の到着の記録やコミュニティーから収集された古い記憶のなかには、ポルトガル人の暴虐を印象づける記事が多く発見されている。東洋の世界に、ガマの到着は偶然でもなければ、一回きりの出来事でもなかったという認識が育つと共に、そのトーンは次第に敵愾心をもっていった。寧ろ、それは、アジア世界の事柄に関し、「新しいパートナー」の出現を、そして、ある場合は、「干渉」を意味したからだった。権益を確立していた者たちにとって尚悪いことには、「新しいパートナー」は、商業上の競争でその思いを遂げられない時には、いつでも、「大砲の弾」を降り注ぐという「鉄則」を課してくるということだった。当時のアラビア人やインド人のムスリムの教訓には、彼らのこのような「恐れ」を明瞭に記録している。

年代記に曰く：

“ポルトガル人は、最初にスワヒリの土地の大きな島であり、貿易のルートでもあるクイロア島に上陸した。彼らは、一旦 国に帰ったが、2度目には、沢山の贈り物をもってやって来て、クイロアの王に奇妙な書類と形式ばった提案を行った。それから、ポルトガル人たちは、アフリカの海岸を去ってインドに向かった。インドで彼らが出現した最初の土地は、カリカットと、マラバールとゴアであった。

マラバールのムスリム（ムーア）達は、当初、健康に生活し、かつ、その国の王の寛容さに感謝しつつ、快適に、古来の習慣を守り、取引でも温和にかつ真摯に過ごしていた。しかし、彼らは、次第に、神の恩恵を忘れ、罪業を重ね、神に対して反乱を行なうようになった。しかるべくして、神は彼らにキリストの僕であるポルトガル人を送り込んだ。神よ、彼らを見捨てたまえ！そして（ポルトガル人を）彼らの主（ぬし）になしたまえ。

ポルトガル人たちは暴君であった。彼らを墮落させ、彼らに下劣なかつ恐ろしい事を強制した。貿易において彼らを丸裸にした。特に、メッカへの巡礼の道を閉ざした。都市やモスクを強奪し、焼き払った。ああ！神よ。彼らに呪いを！！ポルトガル人たちは、インド洋において、今もムスリムの船を拿捕している “

世界史から見た「インド航路発見」：

ポルトガルの紅海侵入とインド洋の支配は、イスラム（ムスリム）世界にとって大きな脅威でもあった。インド洋の制海権を決定する海戦が1509年2月に行なわれた。イスラムのマムルーク朝のスルタン・ガウリー（在位1501－16年）とグジャラートの王

侯の連合艦隊に対してフランシスコ・デ・アルメイダの率いるポルトガル艦隊がグジャラート地方のディユー沖でぶつかったのだ。結果は、劣勢にも拘らずポルトガル艦隊の大勝利に終わった。これによってポルトガルはインド洋貿易の利権と制海権を不動のものとした。それ以降、エジプトを経由する地中海貿易のうまみは急速に失われていった。胡椒1キントール（45キログラム）当たりの値段が、アレクサンドリアでは80ディーナールであったのに対して、喜望峰経由で輸入するリスボンでは20-40ディーナールで取引されるようになったからである。ポルトガル国王は、ヴェネツィア（ヴェニス）の商人に対して、アレクサンドリアでの取引をやめ、リスボンで胡椒を購入してはどうかと提案したときえいわれる。マムルーク朝とイタリア商人は、ともに苦しい立場に追い込まれた。マムルーク朝がオスマントルコの軍門に下ったのは1517年のことであった。

疑問の余地はもはやなかった。ヴァスコ＝ダ＝ガマの航海は、アフリカを巡る最初の周航であったし、大西洋とインド洋の最初の直接のコンタクトであった。従って、地球規模の重要な出来事であった。実際に、地球規模で、それは本質的に、ポルトガルの海上貿易ネットワークを確立する第一歩となった。歴史上に名高いアジアの海を跨ぐポルトガルの「海上帝国」の出現のきっかけとなった。16世紀始めとそれ以降、西欧列強が武力を持って東方に進出したことにより、イスラム世界や日本を含むアジアの歴史は、否応なく大きな変貌を遂げていく事になった。ポルトガルの後継者たちは、スペインにしる、イギリスにしる、その武力の本質を「艦隊整備」に置き、海上支配の構図を継承する事になった。世界が「地中海世界」、「インド亜世界」、「中華世界」と分断されていた時代を通り抜けて、地球的規模で「帝国」（海洋帝国）を築くようになった第一走者がポルトガルであり、その門を開いた世界史的出来事がヴァスコ＝ダ＝ガマの「インド航路の発見」であった。

(完)

参考文献；

- ① National Museum of Kenya, Historical Monument “GEDI”
- ② 世界の歴史8 イスラム世界の興隆 佐藤次高 著